

## 欧州インフラ事情調査報告

玉野総合コンサルタント株式会社  
流域技術部/河川砂防課



加藤 義規  
KATO Yoshinori

### はじめに

今回、私は光栄にも欧州海外視察に参加できる機会を得た。この視察を通して海外のまちづくりと日本のまちづくりの違いを感じることができた。

海外視察はフランス、イタリア、スイス、ドイツの4か国を10日間で巡る視察であったが、その移動は鉄道とバスであった。視察箇所だけではなく、その移動の間の車窓を流れる風景も国ごとに特徴があり、興味深いものがあった。

私は、普段、河川構造物の設計を主に担当しているが、本報告では視察を通じて感じたまちづくりや自然、環境への取り組みについて、私が現地でも感じた思いを述べる。

### まちづくりは国の財産

先述のとおり、今回の視察では鉄道やバスを使った陸路で移動した。点だけではなく線でまちづくりや人々の暮らしを視察することができた。車窓からの風景はどの地域でも統一感のある景観が広がり、各地とも景観に対する意識の高さが伺えた。建物の高さ規制はもとより屋根の勾配や色彩など、国や地域が景観を財産として捉え、計画的なまちづくりを進めて来た結果であろう。(写真1参照)

ヨーロッパの景観に対する取り組みをそのまま風土の違



写真1 チューリッヒ市街の街並み

う日本に取り入れることは難しい。しかしながら、様々な国における取組みを知り、どのように景観と向き合うかを考える事が重要と感じた。

### 市街地に賑わいをもたらす計画的なまちづくり

ドイツでは都市を数段階のレベルに区分し、トップレベルの都市には大学、次のレベルには高校、さらに次のレベルは中学校と整備メニューをきめ細かく定めている。医療部門では、高度な医療から診療所まで、交通計画では飛行場からアウトバーンでの接続等のメニューが定められている。これら計画的なまちづくりにより、それぞれの地域の規模に応じた整備が効率的かつ効果的に行われている。さらに郊外での出店規制を行うことで比較的小規模な街でも中心市街地が昼間から賑わっていた。

日本に目を向けると、各地に飛行場が乱立し、大学は各都道府県に数多くある。さらに、郊外型の大規模店舗の出店により中心市街地は衰退し、各地では大きな課題となっている。成熟社会のなかで、それぞれの地域が役割を明確にして効率的で魅力的なまちづくりに向けて動き出す必要があると感じた。

### 旧市街と車両通行

旧市街と呼ばれる地域では古くからの街並みが保存され、昼夜を問わず多くの観光客で賑わう。石畳の狭い路地が続いているため、車両の通行が困難である。ミラノでも大聖堂周辺は多くの人であふれる。このため、旧市街や観光地への車両の通行対策が工夫されている。

フランスで多く見られたものが“ライジングボラード”である。(写真2参照)これは、平常時は車止めが出ているが、道路脇にある操作盤に許可証等を挿入することで車止めを下げ、車両を進入させる方法である。また、ドイツでは歩車共存(写真3参照)を設定している区域も見られた。自動車の速度を下げ、歩行者との共存を図ろうとするものである。遊んでいる子どもや車、家が描かれたわかりやすい標識が掲げられ、車も低速で走行し、共存が



写真2 ライジングボラード



写真3 歩車共存の標識

成立している。

ヨーロッパでは歩行者が優先されているため、横断歩道付近で立ち止まっていると走行している車はほとんどが停止する。我が国でも“コミュニティ道路”による車両の速度抑制とあわせて、ドライバーの意識向上も必要であると感じた。

### かわづくり・自然再生

ヨーロッパ各地の川は、今でも人々の生活に密着している。スイスのルツェルンを流れるロイス川ではかつて水力を利用して小麦が挽かれていた。現在ではこの水力を利用した発電所が設けられている。このような河川の流れを利用した流込式水力発電はスイス国内各所で見られ、貯水式とあわせて水力発電が発電量の半数以上を占める。

また、スイスやドイツでは環境保全・再生の取組みが積極的に行われている。かつて暗渠であった箇所を開水路とし、さらに遊水地としての機能を持たせた公園整備を行うことで自然再生を図るとともに治水機能を向上させ、さらには維持管理費の低減を図ることができた。(写真4参照)このような取組みはわが国の都市下水路等にも活



写真4 貯水機能を持つ公園

用できそうのだが、日本では頻繁に除草を行い施設の維持管理を行う必要がある。市民参加やNPOなど地域との環境への意識が高い地域では採用が期待できると感じた。

### 環境保全のあり方

欧州視察では各地での環境負荷低減への関心の高さを感じた。視察した各国とも駅前を始め各所にレンタサイクルがあり、市内各所で返却できる。自転車専用レーンも整備され通勤でも利用されている。また、風力発電設備やメガソーラーなど自然エネルギーを利用した発電設備も数多く見られた。

ドイツ国内に入ると個人宅でのソーラー発電が多く見られた。これまで景観に対する規制が厳しいと感じて来たなかで、屋根一面にソーラーパネルが設置されている風景には景観と環境の優先順位の考え方に違和感を覚えた。

我が国でも再生可能エネルギーの買い取りが今年から本格的に導入された。私の自宅の周りでも数件設置しているが、地震大国の日本において木造住宅にソーラーパネルを増設した時、建物にどのような影響があるのか興味深い。

### おわりに

今回の視察ではいろいろなハプニングもあった。パリの空港では不審物騒ぎでいきなりの足止め。2日目の夕食時には停電。7階まで階段で上り、まさにキャンドルナイトでの夕食。携帯の明かりで自己紹介もいい思い出になった。ゴンドラでの下山時には故障で一時運転見合わせ。参加者全員で青空見ながらしばしの休憩。

移動の連続だった11日間。末筆ながら様々な知見をご教示いただいた中村先生や国内の第一線で活躍する技術者の方々と視察できたことに、深く感謝を申し上げます。この視察の経験を今後の業務に活かします。